

## いじめについて考える日（校長講話）

平成30年5月7日（月）

長かったゴールデンウィークが終わりました。皆さん、連休中、有意義に過ごすことはできましたか？気持ちがまだ「お休みモード」の人は頭を早く切り替えるようにしてください。

さて、行事予定にも載っている所以大家はわかっていると思いますが、今日は「いじめについて考える日」です。いじめの問題は今や「いじめ防止対策推進法」という法律までできるほど、日本全体の問題となっています。毎年、いじめが原因で何人もの尊い命が失われていることも皆さんは知っていることだと思います。もちろん大阪も例外ではありません。そこで平成28年に大阪市内の小学生の提案をきっかけに大阪시가、みんなで「いじめ」について再認識し、「いじめ防止」の意識を高めようと、「いじめについて考える日」の設定を決定し、昨年からは5月の大型連休明けの月曜日をその日として定めたのです。

もちろん誰もが、いじめはいけないことだとわかっているにもかかわらず、どうして、いじめはなくならないのでしょうか。それは人の心の弱さが、人に対していじめをするという行為にでてしまうのではないかとされています。例えば、「むしゃくしゃして、そのはけ口になっている」「自分と価値観の違う人を排除しようとしている」「自分より劣っている人を見て、安心したり優越感に浸ったりしている」などいろいろあると思いますが、これらの心の弱さが人の心を踏みにじる「いじめ」という卑怯な行為として表れているのです。皆さんもこれまでを振り返って、人に対して嫌な思いをさせるような言葉や行動がなかったかどうか、考えてほしいと思います。

そしてもう一つ、いじめ問題の特徴としていえるのは、「いじめる人」「いじめられる人」以外に「周りの見ている人達」の存在なのです。ここで、ある中学生の作文を紹介します。この人は5年生までドイツで生活していて、その後、日本に帰国した生徒で、その作文の中で日本のいじめはなぜ長期化するのかを指摘しています。それでは読みます。

『では、なぜ日本のいじめは長期化しやすいのでしょうか。それには、二つの原因があると思います。一つ目は、日本の根本的ないじめのあり方にあります。例えば、ドイツで「いじめ」といったら、大抵校庭などのひらけた場所で下級生など自分より弱そうな相手や、気に食わない相手に暴力を加えることを指します。この種のいじめは暴力的で、比較的目に付きやすいので、すぐに先生の指導が入り、長続きすることはほとんどありません。一方日本で「いじめ」といったら、暴力よりもどちらかといえば嫌がらせや集団無視などの精神的苦痛を与える行為を指します。このやり方だと、表面上は何もなさそうに見えるので、周りからは気付かれにくく、結果、先生方など学校側の対処も遅れてしまい、いじめが長続きしやすくなってしまいます。

二つ目は、周りの見ている人達の反応です。私も一、二度、ドイツで上級生にいじめられたことがあったのですが、どの時も必ずそばにいた同級生や知り

合いが味方になってくれて、協力していじめっ子を追い返していました。私の経験に限らず、いじめを見たら必ず周りの人達が止めに入ったり先生を呼んだりなどしていました。しかし、私が通っていた日本の学校で一度いじめが起きた時、気の毒に思いながらも誰も助けようとはせず、むしろどこか逆らってはいけなような雰囲気が漂っていました。つまり、いじめのストッパーとなるものがなく、どんどんエスカレートしていった、長期化してしまうのです。』

（第36回 全国中学生人権作文コンテストの内閣総理大臣賞受賞作文より抜粋）

いじめは生命をも脅かす行為であり、人間として絶対に許されない行為です。いじめをなくし、みんなが安心して安全な学校生活を送るためにも、一人一人が違いを認め合い、常に相手の立場に立って物事を考えられる優しさを持つとともに、「いじめは絶対にしない」「いじめは絶対に許さない」と心にしっかりと刻み込むことです。それでも、もし嫌な思いをすることがあれば、絶対にひとりで抱え込まずに、身近な人（例えば、先生や家族や友人など）に相談をしてほしいと思います。そしていじめを見かけたときには勇気をもって止めてほしい。それができなくても近くの先生に知らせてほしい。決して自分は関わりたくないというような「無関心な傍観者」にはならないでください。

君たち一人一人が、この大正北中学校を笑顔あふれる、いじめのない安心して安全な学校にしていこうという気持ちを持ち続けてくれることを願っております。